

私の博物誌

題字 石川進

第二十七回 「香福」

改めて記すことではないが、私たちが全身で感じ取る感覚は多岐にわたる。仏教ではこれを「六根」といい、「眼耳鼻舌身意」の六つの感覚の総称をいう。「ドッコイショ」は普段口を衝いて出る言葉だが、これは、福德により六根が清らかなる為唱える「六根清浄」が転訛したものだと思われる。

ここで、我に返った感覚がある。深く記憶の底に沈んだものが、脳の奥の方から這い出して来て意識の正面に座る。匂いの記憶なのだ。六根の中の「鼻」、嗅覚のことだ。眼福や口福は割に多く耳目にするが「香福」とはあまり聞かない。これはここ数年来、新春を迎えるたびに頭の中で勝手に明滅する自造語だからだ。

私自身、書を心の杖として生きて来た道々、漢字に関する資料はどうしても中国に委ね、他の用材もほとんどのものが中国製を用いるように、結果としてなった。何度

も中国へ渡るうち、仏教の戒律を伝えるべく渡来し、計り知れない文化の伝来を担った「鑑真大和上」の出身地、揚州に友人、知人が沢山できた。「揚州の八怪」で知られる土地柄は二千年余りの歴史を誇り、数々の名所がある。

旧市街地を少し郊外に出たところの山頂に在る城砦を改修し、「唐城趾公園」として一般に開放された一画に「唐城趾博物館」がある。年を越す頃の訪問だったのは幸運で、大株の蠟梅が花を山盛りに付けていた。

案内役を買って下さった揚州博物館、徐良玉副館長がその一枝を折り、妻に下さったのだ。蠟梅を知った最初の経験で、その花の香りは実に素晴らしかったのだ。

時を経ず、国内でも出廻るようになり、逐次苗木を手に入れては雑多な植栽の庭の所々に植えてみた。活着するもの、枯死するもの、接ぎ穂が枯死して悔しがっている、台木は生きていて、花も香りも質素な

種の再生に、内心喜んだりしながらの生活だった。

蠟梅は唐梅ともいわれる。十七世紀の初頭、朝鮮を経て渡来したものだ。梅の名は付いていても属は異にし、「蠟梅科」として独立する。今では数種が紹介されてい

て、花卉の立派な「檀香梅」、少し花卉の狭い「荷花梅」、花全体が薄い黄色の「素心蠟梅」などがある。

拙宅のものは素心蠟梅が二株と「満月梅」のプレートを付けられたものが活着した。素心の方は全てが控え目なのが好もしく、満月の方は割高だったが、一株は妻の窓の下に、もう一株は山の斜面に植え込んだが、櫻の木の蔭になり、成績は今一つだ。

妻の窓下の苗は良く育ち、三メートル程になった樹全体の花が放つ芳香は、まさに「香福」の象徴であろう。苗木の成長と共に年の暮れから二月半ば頃までの、この花の香りに心行くまで酔うのが、新春を迎える頃の習慣となっている。

この香福の奥には、寒中の公園で巨大な蠟梅の一枝を折って下さった異邦の友人、朴訥で口数は少ないが気の良い徐良玉副館長の面影が、花の向こうに透けて見え、温かい人情に酔うところもあるらしい。

私の為の巨大な個展を開くべく奔走された顧風館長の強靱な精神力は、実に一万三千七百平米を使い、大小合わせて二百点余の作品の展覧となつて結実した。

今は古運河の世界遺産登録へ向けて必死の努力を続行中とか。近い将来、第二の故郷でもある揚州へ行って諸先生と談笑しながら、書会を開きたいと、いつも心に思っている。



毎年、拙宅の庭先で花を付け、芳香を漂わす蠟梅



書いている人

石川 進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員、書法探求顧問

企画、営業、DTP 制作募集

ここには“汗”がある。

■お問い合わせは■

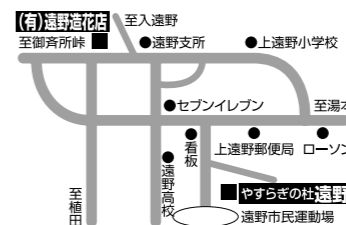
TEL(0246)29-2424 E-mail:read@iwaki-j.net

〒971-8141

福島県いわき市鹿島町走熊字小神山29(ヤスミツ第1ビル2-A)

(株)いわきジャーナル 月刊 いわき

故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。



やすらぎの杜遠野

〒972-0161いわき市遠野町上遠野字赤坂27-1
TEL.0246-89-4777